

東ピレネーの春 (一)

小 牧 實 繁

巴里大學文學部地理學協會 (Union Géographique de la Faculté des Lettres) の主催でパークの休みを利用して東ピレネーに研究旅行すると云ふ觸出しのあつたのはもう大分前のことであつた。自分も協會員の一人としてそれに

參加する積りで記名登録し旅中不慮の災難は各自に於いて責任を持ち協會に迷惑をかけざることの誓約など全協會員のする通りの手續きも濟ませ、會費を拂込んだり旅裝の準備をしたり、ソール教授の「ピレネー」(Max. Sorre, Les Pyrénées) を讀んだり等出来る丈けの用意をしてパークの到來を待つたのである。

四月一日(一九二九年)、月曜日。愈々出發の日は來た。午後七時日本料理で夕食を濟ませ、食後オルスニー驛 (Gare d'Orsay) に至る。集

るソルボンヌの學生等は何れも思ひ思ひに然し何となく物々しく活潑ないでたちで皆々互ひに軽い昂奮を覺える位である。自分も確つかり歩かなければならぬと覺悟する。

九時十五分汽車は南佛カルカソンヌ (Carcassonne) に向ひ首都巴里を發つ。巴里よ暫らくさよなら。

此の旅行のため我等は汽車を一輛買ひ切つた。そう云へば如何にも豪華らしく聞こえるが實は三等車の而も誠に汚らしく頗る因縁のあり相なものなのであるから滑稽である。それに殆んど満員であるから横になつて寝る譯にも行かぬどうせ寝られぬならとて皆んな元氣にはしやいで居る。

學生同志の言葉つたら正規の會話丈を練習し

たのでは中々よくは解らない。何か自分に話し掛けて來ることは兎も角彼等同志の饒舌は半分もよくは解らぬので閉口する。それに何と云ふひようきんな而もオリヂナルな遣り方であらう荷物棚の網の上へ上つて一夜を明かさうと云ふ御嬢さんがある。東方君子國の紳士は正に度膽を抜かれた形である。皆も盛んに喝采する。でも十二時を過ぎると流石に馬鹿騒ぎをする者もなく皆んな大人しくまどろんだ様である。

ルコント嬢も亦此の汽車に乗つて居る。これから一週間又一所に旅行が出來、その愛らしい顔が見られるかと思ふと嬉しい様な一面には恥かしい様な氣がする。

聞けば今度の參加者は四十餘名だ相で、こんなに大勢參加したのは此の會初まつて以來未曾有のことであると云ふ。副會長メー君(May)のオルガニザシオンの苦心が察せられる。彼れは先に出掛けてカルカツンヌで一行を待つとのことである。

四月二日、火曜日。ブリーツ(Brive)の邊で

夜が明ける。洗面が出來ないので男も女も御嬢さんも奥さんも(實際夫婦連れの學生も參加したのである)オー・ド・コロンで顔や手先を拭いて御座る。成る程これは便利なことを考へたものだ。自分も私かに携帶のそれで顔を拭く。唯口が嗽げないのは少々氣持が悪い。尤も巴里では洗面嗽口の前に朝食をとる風流子?も多いのだが、日本人には一寸眞似の出來ぬ藝當である今朝は致度なく郷に従ふのである。もうコース(Cause)の地方には入つて居るのだ、カルストの景觀を車窓より楽しみ見ながら持參の辨當を朝食として攝る。ツールーズは二十分の停車であるが市中を散歩するには時間が足らぬ。

十一時カルカツンヌの驛に着くとメー君が出迎へて居て呉れる。メー君外若干の先着者と我々の一行とが驛前運河に架つた橋の袂で集合し、人員の點呼が濟んで茲に隊の編成はなり以後團長メー君の指揮統制に従ふこととなつた。

メー君は佛蘭西人學生には珍らしいゴルフ服に荒目の外套と云ふ出で立ちで背囊を脊負つて

ゐる一寸アメリカ人と云ふ感じのする男であるが皆の氣受はいいのらしい。

カルカッソンのコレージュを指し其處に荷物置いて先づ中食をする。此の學校は丁度日本でも古い田舎の中學校と言つた感じを與へる舊式の建物である。

午後カルカッソンの舊城内を見る。日光を見ぬ中は結構と言ふ勿れではないが佛蘭西でも「カルカッソンの見ぬ中は死んでならぬ」と云ふ諺もある位であるが、不思議なから其のカルカッソンの見る事となつたのである。早くも汽車の窓から認められた、御伽噺の中にも出て來相な、異様な、而も美しい空線を描いて丘の上に聳えて居たあの不可思議の古都、夢の中でもなければ見ない様な怪く空想を唆るその輪廓、それを今目の邊りに見るのである。オード(Aude)の河に架けられた美しい古橋から見た此の城市の全景！なる程古都カルカッソンの見ぬ中はの諺も解せる。「カルカッソンの見ぬ中」と言ふ言葉は簡單ではあるが佛蘭西人

にとつても大きな喜びの言葉なのである。

カルカッソンはオード河南方の丘上に立ち河を北方大手の防禦線となし、周圍に堅固な防壁を繞らし城壁の所々に望樓を配し城内には御寺を初め多くの古い民家を有する模式的の城砦都市であるがその結構の雄大で而も優美な建築美を兼備へたものとして歐羅巴の他の何れの地にも之れに比敵するものを求めることが出来ぬ丘の麓には今新都市が發達してゐるが之れには別段見るべきものもない。

一人の地方考古學者に案内せられて城門に入り、先づサン・ナゼール (St. Nazaire) の御寺を見る。カロリンジアン、ロマン、ゴシックの各様式を交へた美しい建築で、その彩色硝子は殊に素張らしい評判を有つ。吾々如き美術建築の素人が見るのには何だか勿體ない様な氣がする位である。

此の宗教建築に對してカルカッソンの軍事的建築の又如何に勝れたものであることよ！中世築城術の結晶と言ふのが此の際最も平凡で

はあるが而も最も適切な言葉であるのを知る。尤も基盤には羅馬時代の築造が部分的に残存してゐるから全體的に中世のものと謂ふことは出來ないが、それは即ち此の地が既に早くから重要な要害であつたことを證するもので羅馬時代以來築きに築いたものが中世に至つて完成の域に達したものと云へよう。而して今日最早や何等の軍事的戰術的意義を有しない此の建築が吾等遊子に絶好の懷古遊歩の舞臺を供するのである。曰く「裁きの門」「異端糾問の門」「城内觀劇場」等々。そして古來常に修理に修理を重ねて來たものにしてその餘りによく舊觀の保存せられてゐることよ。大きな地震の災がなく自由にと煉瓦を積み得た條件の存在はさることながら一度成つた完全の城廓が餘りにもよく保存せられ舊態を示してゐるのを見ては少からず此の國柄が羨しくなる。時の経過も風雨の力も此の國柄に於いてはさしも美しい建築に對して少しも魔手を延ばすことが出來なかつた様に感ぜられる。

望樓から下界又た遠山の眺望の極りなく美しいことよ。北には黒山(Noire)を背景とした下ラングドックの叢原(Bas-Languedoc)、南にはコルビエール(Corbieres)山々の起伏。吾等は昨日の影ることの餘りに早きを憾むのみであつた。カルカソンヌよさらば！御寺の廣場、役場の近くの物さびた土産店で買つた繪葉書位をせめてもの記念として靜かに驛に歸る。

六時九分カルカソンヌ驛發、借切列車は初めオードの谷を溯り、アグサ(Axat)、リーヴサルト(Rivesaltes)等を経て八時九分キヤーン(Quillan)驛に着く。團長メー君の祖父クロー氏(Cros)が出迎へて下さつた。今宵は氏の許に宿泊する豫定になつてゐたのである。

所がそれは驛から尙二軒のジノール・レ・バン(Ginols-les-Bains)と言ふ田舎なのである。少々がつかりせぬ譯にも行かなかつたが學生達には案外元氣である。歌を歌つたり掛け聲をかけたり歩調も勇ましく時々は暗闇の中に躓いたりなどもするが割合早く爪先上の坂道を登る。

闇の中でよくは解らぬが樹立のただずまひも静かな落着い建物のある所、それが御祖父さんの屋敷であつた。鑛泉の湧く質素な夏の休養地らしい。家人二三人も門まで出迎へられた。

美味しい豊富な晚餐に腹は納まつたが今宵は誰も踊らうとはせぬ。昨夜の汽車で疲れても居り第一時間も遅いしそれに明朝の起床が六時半と定められてゐたから。

外國人だからと言ふ譯か自分は一人で一室を占領する様にして呉れた。それは質素な飾りもない而も落着いた室で氣持よく安眠が出来て何よりであつた。

四月三日、水曜日。六時半起床、下女の置いて行つた水壺の水で洗面し朝食を濟ませて徒歩キーヤンに降り八時十分キーヤン發、汽車でサン・ポール(Saint Paul de Fenouillet)に向ふ。

キーヤンは柔かい頁岩の盆地中に位する地方の一中心であるがそれからアグザ迄は汽車はオードの谷を縫ふ。此の谷はキーヤンの少しく下流に初まるピレネーの平行地質帯系列を横斷す

るエビゼニクの谷で頁岩の如き柔かな岩石の部分では廣く浸蝕せられてゐるが堅い石灰岩の部分に於いては狭い峽谷を形成してゐる。

九時二十二分、サン・ポール着。此れはフヌイエー(Fenouillet)凹地中の一村落である此の凹地は大體アプチアン(alpin)期の二つの背斜間に挟まれたアルビアン期(albien)の幅廣い向斜(地質は黒色頁岩よりなる)であることせられてゐるが、勿論それは大體のこととその構造は實際は中々複雑である。北方の背斜は横臥褶曲してホルビエールの古生層及び白堊系の上に不正規の接觸をなしてゐると云ふことである。

アグリー河(Agry)と言ふのが此の凹地をその走向と直角に横斷し背斜の石灰岩を切り刻み此所に鋸でも挽いた様な二つの峽谷を形成して居る。ガラミユスの峽谷(Galamus)とフウの峽谷(La Fou)即ち之れである。殊に前者はその規模も大きく景色も野性を帯び雄大で一寸その類例を他に求めることは出来ないであらう。規模に於いては確かにグランド・キャニオンに一

鑿を輸するがその垂直に切り立つた石灰岩の絶壁と絶壁の間に深く狭く切り込まれた峽谷の美は確かに世界の一偉観である。唯少々道が不便でアメリカ人等の訪れる者が少ない爲世界的に有名にならず第一佛蘭西人が餘り宣傳などを好まぬので廣く世に知られるには至らないばかりである。後者フウの峽谷は前者に比すると規模も左程大きくなく景色も野性に於いて劣る所が多く、そして割合に早く峽谷を過ぎて又此れと直角のフヌイエーと平行の谷に出て仕舞ふ。

アグリーの谷はオードの谷と同様エビゼニク (yigénique) であることは明かである。その水理は現在の地體構造乃至地形に對して何等の順應をも示して居ない。即ちアグリーの水系は元來ペネプレーンの上を地中海の基底水面に向つて流下しアンシニャン (Ansignan) の古地塊中に河身を刻し此等兩峽谷を作つたものである。而して此の下刻作用には三つの輪廻があつた。第一の輪廻は高度九〇〇—九五〇米の中新时期平原に代表せられ第二のそれは現在の谷底上一

〇〇—一五〇米の高度を有する鮮新时期段丘によつて代表せられ (此の段丘はオードの谷とフヌイエーの凹地とを分つ)、第三即ち現在の輪廻は鮮新时期の終りに初まりサン・ポール附近の甚だ明瞭な低い段丘によつて代表せられる。

こんな話しをピレネーの研究家大学院學生ドレーシュ君 (Dresch) から聞いて先づガラミユスの峽谷を見る。

實際こんな景色が佛蘭西で見られやうとは豫期しなかつた。實に深い狭い谷だ。そして又此の谷を通る北風の強いこと！ 峽谷の上腹に着けられた山道では砂や小石が切りに飛ぶ。殊に風が谷壁の出張りに激突する所は特にそれが強く吾等は幾度かよろめきよろめき苦歩するのであつた。

對岸の嶮崖中腹に營まれた隠者の庵 (ermi-age) を訪れる。こう云ふ淋しい山中の岩蔭を利用してささやかな家とも寺とも分らぬものをこしらへ其處に行ひ澄ました人達も嘗てはあり又今も尙殘存するのである。岩蔭の奥には洞窟

があり、マリヤの像などを祭つてゐた。

名も知らぬ黄色い草花が咲いてゐる。女學生等がそれを摘み初めた。そして大人しく眺めてゐた自分にも分けて呉れる。「小牧さん御となさい、本式から言ふと若い女が男に花をあげたり等しては悪いんですけれど御免なさい」だと。

巴里から持參の冷食で中食を濟ましてフウの峽谷を見たのであるが午前にはガラムィヌを見てゐるので大したことはない様な氣がする。

フヌイエーの凹地は單に地形學上のみならず氣候學上からも尙一つの興味を提供してゐる。即ちフヌイエーに於ては吾人は既に地中海斜面に存在するのであつて、此所では夏季氣候の乾燥なため橄欖の木が認められ又所謂ガリグ(*garigue*)が斷續して白石石灰岩の山地を被つてゐるのを見るのである。

交通地理の見地から言ふとフヌイエーは元來其の東方の出口が縊れてゐる爲鐵道の開通以前に於ては交通の幹路とはならなかつたのである。

徒步十五軒の見學とピレネーの研究家ドレーシユ君の懇切な説明とによつて多くの知見を廣めた吾等は四時四十二分、十五世紀の古い民家や狭く曲つて薄暗い感じを興へる舊街路を持つサン・ポールの村を去り五時五十一分キヤン驛に歸着、昨日にも増した愉快さを以て徒步ジノール・レ・バンに登る。

夕食後若き男女地理學徒は日中の足の勞れなんか忘れたかの如く夜遅くまで踊り抜いたのである。

四月四日、木曜日。六時半起床、朝食、前後二日の宿を貸して呉れたジノールの家を辭し徒步キヤンに降り八時から町の帽子製造工場を見る。大體此の地方の羊の毛を材料として發達した工業であるが、實際面白く帽子が出来て行く。簡單と言へば簡單、複雑と言へば複雑な工程を経て。

八時半過三臺の自動車に分乘してモン・ルイ(mont-Louis)を指す。

オードの谷の景色が車輪の下に展開する。此

所では地中海斜面の特徴が急に消滅し、キーンの附近には堅い石灰岩の上に尙ほ柵 (Chènes-verts) の茂みを見る。

マール・リー (Pierre-Lys) ヲサンジオルジュ (Saint-Georges) の二峡谷を通る。此れは結晶質若くは白雲岩質石灰岩の山稜を横断するもので突兀とそそり立つ絶壁の間を水は碌々たる岩石を洗つて轉落する。

凹地と峡谷との交替、雨量の豊富は相俟つて水力の利用を有利ならしめる。實に此の東部ピレネーは佛蘭西に於いて最初に水力利用の發達した地方である。急斜面に架せられた導管、峡谷の横腹に掛かつた通水溝、發電所等が道中至る所に認められる。吾々日本人には左して珍らしい景觀でもないが、馬鈴薯の葉一つ知らない多くの巴里人學生には大分珍奇な景色と看取せられてゐるらしい。

高度が増すと共に寒さは追々に加はる。それに峡谷の景色を見るため無蓋の自動車を借りたので全くの吹き曝しであるから堪らぬ。紫色の

頬、赤色の鼻尖が寒さうに震へてゐる。水鼻を垂らす若い男もある。手足はしびれる。全く以て助からぬ。細そりとした體格の鼻の高い頭は到底もよさそうな西洋史專攻と云ふ男、此の上ない頑張り屋で手袋もはめて居ない (地理學徒は流石に用意がよく防寒準備をしてゐるが實際それでも寒い) 水鼻を垂らしてゐるので「寒いね」と言へば天の邪狗に「いや自分はそんなに寒いと思はぬ」と來た。

ドネザン (Donzan) を横ぎる頃は雪が來た矢張りピレネーは高いんだと思ふ。斜面には樅が繁茂し道は河の上に九折路をなして上る。

カルカネー (Carcanel) の森を出るとカプシール (Capir) だ。後へに残した深い峡谷に比して何と云ふ景觀の對照であらう。地形は如何にも柔かく優しく徐々に高まつてやがて森に續く「吾人は高度の感覺を失ふ」とツールは言つた。實際吾々はそんな高い所に居るのだと云ふ感じがしない。所が四月四日だと云ふに雪は尙地上に消残つてゐるのである。

村々は多くは集村で山の斜面の凹所に立地してゐて強い寒い北風所謂カルカネー(Carcagnet)から保護せられてゐる。カルカネー嵐と謂ふ譯か。その生業は牧畜が基調をなし森林が次第に牧地に蠶食せられた。

ピュイ・ヴァラドール(Puy-Valador)に目下築造中の水力發電用堰堤を見る。壹千萬立方米の水を蓄積し得るものと云ふ。幹部の一人大学院學生スルディヤ君(Sourdillac)の臨地説明が吹雪の中で然し谷を見下す形勝の地點が始まる。實言ふと水力電氣の話しなんか自分には大した興味はないのであるがよく調べた上での話ではあり吹く風寒き山中での御講演御苦勞と思ひ謹聽する。それによれば此の工事は南佛水力輸送會社の事業であると言ふ。

此の高谷の人口密度は一平方籽一五人で甚だ稀薄であるがそれが益々減少の傾向を有し或る村の如き低地向ふ移民の爲全然消滅したものですら若干は有ると。此の低地と言ふのは即ちルーシヤン(Roussillon)である。

カプシールを横斷し高度一七二〇米のキーヤヌ(Quillane)の峠を越つてモン・ルイに向ふ此の峠は峠とは言ひ條大した難路ではない。實際峠とは言へない位平かな道で起伏は少なくて幅は廣く全地塊の准平原化を示して居るのであるが一の斜面から他の斜面へ越す時でも殆んど氣が着かない位である。

キーヤヌの峠を越すとモン・ルイで我等は既にテー河(La Tè)の谷に入つたのである。

モン・ルイ(Mont-Louis)(一六〇〇米)はカプシールとコンフラン(Conflent)とセルダニーニ(Cerdagne)との接觸點に構へられた城砦の所在地である。小さな町であるが町即ち城砦で周圍に堀と城壁を繞らし又所々に望樓がある。大手に當つて「佛蘭西の門」(La Porte de France)と言ふのがありそれを入ると間もなく廣場があり、廣場に面して旅館がある。蘇生の思ひをして自動車から降り旅館に憩うて中食をとる。火の氣のある所で空腹を醫した時の快さ、今以て忘れな。

時間が迫るので大急ぎでフォン・ロムー(Font-Romeu)を指す。徒歩だから割合に悠くり景色を楽しみ見ることが出来る。若自身だつて中々美しい。カルカソンヌを小規模にそして平べつたくした様な感じを興へる。

その道の愉快なことよ。初めだら／＼と降り又羊腸の坂を登る。樅の林を通ると降り積り消残つた雪が未だ中々深い。暖い陽光の下に他愛もない雪合戦が始まる。所異れど品は變らず、無邪氣な悪戯迄流行り出して暫し陽氣にはしやぎながら進む。苦歩しながらも愉快である。

暫らく行くと基督の拜所がある(標高一七七六米)景色が開けるので雪も残つてゐない。そしてその谷を見下し向ふの山々を眺める景色のすばらしいこと。

脚下に見えるのはセルダーニ(Cerdagne)の地、南方にはピュイグマル(Puigmal)の山塊とシエラ・デル・カデテ(Sierra-del-Cadi)の障壁が聳え西南にはカルリート(Caritte)の柔かい氷蝕山頂線が靄にかくれてゐる。

氷河の跡は至る所に認められ多くの湖水と平底の谷が存在し、谷は時として沼澤的であり、カプシールに於ける同様此所にも多くの堆石が發見せられる。

カプシールと同様セルダーニでも夏は家畜が樅や松や樅や山毛櫸やの美事な森林の上に追ひやられ所謂避暑遊牧が行はれる。

森林地帯も元來傾斜は緩であり開墾すれば耕作に適するので、農業を可能ならしめる最高限度迄森林を伐採することが此の地住民等の熱烈な望みであつたが漸く公けの権力を以て之れが保存に努めて來たのである。

セルダーニに於いては牧地灌漑の方法を以て牧畜を盛ならしめ灌漑水路の利用に就いては西班牙領セルダーニとの間に契約が結ばれてゐる位である。

又氣候が乾燥で地中海沿岸地方と多分の類似點を示すので此の谷の北斜面には多くの果樹園が分布してゐる。

セルダーニの首府は西班牙領内ピュイゲセル

ダ (Puigcerda) 一七七年アラゴン (Aragon) の王により最も形勝の地に建てられた町である。云々。

拜所に立つてこんな説明を聞く内に早や青色の幕が一瞬の景觀に垂れかかり空は夕焼けで蒼薇色になつた。

何時まで眺めたとして飽くことを知らぬ景色ではあるが先を急がなければならぬ。名残りを惜しみつゝ拜所を降りてフォン・ロムウの隱者の庵を訪れオデイロ (Odello) まで降る。

グラントテルと稱する大きなホテルや蕭洒な別荘などが可なり多い。尙空氣療養所もあると言ふ。夏にかけては中々賑ふ所らしい。

そうかと思ふと一方には碌々たる漂石を積ん

で石垣とし牧場を圍つた邊りに所々シャレーが點々してゐる。牧畜國の眞只中なのである。可なり高い石垣を飛越え飛び下りなどして段々下へ降る。日は殆んど暮れる。

七時七分發の電車に間に合ひ七時二十六分モン・ルイ驛に歸る。仲善く皆んなで腕を組み合ひ歌を歌つたり叫んだり等して少しの坂路を登り「佛蘭西の門」を入る頃は全く暗くなつてゐた。歩行は精々十五籽であるが宿 (Hotel de France) に着いた時は皆んな流石に少しは疲れてゐる。

夕食後町の中の散歩に出た少數の者を除いては踊つた者も相當多く十時疲れて寢に就く。

(未完)